



沢遊びに興じる子どもたち。東京郊外の自然の中で、のびのびと過ごしていました。

パルシステム東京の震災復興支援基金、「パ  
ミライカ  
ル未来花基金」は、2014年の創設以来、延べ  
57団体に約1,400万円を助成しています。  
助成先の一つである「福島子ども支援・八王  
子」が17年7月31日～8月3日、「2017なつやす  
み ふくはち親子交流合宿」を開催しました。  
福島の親子、16家族48人が参加した合宿の  
模様を紹介します。

## 福島の親子が リフレッシュできる場を

「ザリガニがいた〜」「カニを4匹も  
捕まえた!!」。子どもたちの歓声が  
上がっていたのは、大地沢青少年セ  
ンター（東京都町田市）の敷地内を  
流れる境川。「福島子ども支援・八  
王子」（通称・ふくはち）が開催した  
「2017なつやすみ ふくはち親子交  
流合宿」(ふくはち合宿)の一幕です。

ふくはちとは、福島の親子との交  
流合宿に取り組むグループ。ふくはち  
共同代表の近藤波美こんどうなみさんは語ります。

「原発事故後、八王子市（東京都）  
では市民の放射能や原発への不安に  
応える、『子どもたちの未来と自然エ  
ネルギーを考える八王子市民講座』  
が立ち上がりました。その中で、外  
遊びが十分にできない子どもや、不安  
を抱える保護者の実情を知り、その  
ような福島の親子にリフレッシュでき  
る場を提供するために、ふくはちを設  
立。2012年から保養企画を始め、  
春休みやゴールデンウィーク、夏休みに  
ふくはち合宿を開催しています」

## カンパとボランティアによる 手づくりのふくはち合宿

ふくはち合宿の特徴は、すべてカ  
ンパとボランティアによる運営で、食

# 福島の親子を支える保養企画 「ふくはち親子交流合宿」

福島子ども支援・八王子、パルシステム東京



子どもたちが協力合って、新聞紙で大きなかぶとを作りました。



ふくはち合宿を運営された方々。後列左から奈良本洋二さん、  
近藤波美さん、鳴海有理さん、花崎 晶さん、相原一晴さん、  
前列左から田中真理さん、榎本知子さん、前田佳子さん。

写真：五味明憲





今回の合宿では、リピーターのお母さんによるワークショップも開催。写真左が「アクセサリーづくり」、写真下は「抹茶カフェ」。



写真左上：食事もすべてボランティアが作ります。料理ボランティアの多くは、普段は学校給食を作っている調理師さんたちです。写真左下：学生ボランティアの皆さん（合宿の参加者の子どもも飛び入り参加）。最後列右端が鈴木 蓮さん。



事も自炊の手づくり合宿であること。これに資金の助成をしているのが、パルシステム東京の「パル未来花基金」\*です。同生協の組合員でもある近藤さんは「資金援助がないと、この企画は成り立ちません。本当に感謝しています」と言います。

日によって異なりますが、ふくはち合宿には1日に30人程度のボランティアが参加します。子どもと一緒に遊ぶほか、参加者全員の食事は作りや、乳幼児の保育など役割はさまざま。また、地元の農家の方が食材を提供してくれたり、多くの人が合宿運営を支えています。

「子どもを見守る人も多くいらして、子どもたちが生き生きと自然の中で遊んでいます」とコメントをくれたのは、今回が2回目の参加という佐藤良恵さん。

中でも参加した親子から絶大な信頼を得ていたのが、大学生のボランティア。彼らの周囲には、常に子どもたちの笑顔がありました。学生ボランティアのリーダー、鈴木蓮さんに話を聞きました。ご自身も福島市出身で、参加者に親近感を覚えるそうです。



お話を伺った官野和香子さん（後列左）、金田理恵子さん（後列中央）親子。



ふくはち合宿終了後、参加者とボランティアスタッフ、全員集合！（写真提供：ふくはち）

「子どもは大人を映す鏡のようですね。こちらが笑顔で接すれば、笑顔も返してくれますし、ありがとうと伝えれば、ありがとうと言ってくれます。そこがうれしくて今年も参加（3年連続）しました」そんな学生ボランティアの活躍ぶりに感動していた一人が、3人の子どもと参加していた金田理恵子さん。「私の子どもも将来、このようなボランティアをできるようにしてほしい」と話してくれました。

ふくはち合宿の狙いの一つに、同じ思いを持つ保護者同士の交流があります。今回初参加の官野和香子さんは、「大学生などが子どもの面倒をみてくれるので、母親同士でリフレッシュできたことが大きい」と話します。

過去に参加した方々が、合宿終了後もお付き合いを続けているケースもあるそうです。

また、今回の合宿では、リピーターの参加者によるワークショップも開催されていました。今回のメニューは、伊藤美紀さんの「抹茶カフェ」（抹茶たて）と阿部こずえさんの「アクセサリーづくり」。お二人とも自らの意思で、開催を決めたそうです。これに関して、近藤さんは「これからは、主催者側がすべてお膳立てをするのではなく、参加者のお母さんたちと一緒につくっていく合宿にしていきたい」と語ります。

ふくはちのスタッフである前田佳子さんに、活動の今後について伺いました。「同じ子を持つ母親として、原発事故に対する不安や心配は、とてもよく分かります。これからもふくはち合宿を続け、福島の親子とつながりを持っていきたいです」

\* パルシステム東京の組合員が商品やサービスを利用することで生まれた剰余金を元に、組合員の東日本大震災復興支援活動を資金面で支援する仕組み。詳細は「パルシステム東京 パル未来花基金」で検索を。